

平成27年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	どうししゃこくさいこうとうがっこう				②所在都道府県	京都府
27～31	① 学校名	同志社国際高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	平成26年度 在籍者数833名	
普通科	270	60	60		390		
⑥研究開発構想名	持続可能な社会を担うグローバル人材育成プログラム ～環境先進国に学び世界に提言						
⑦研究開発の概要	1年生必修科目「Global Understanding Skills (Basic)」を設置し、持続可能な社会について環境先進国の事例を学習する。2年生選択科目「Global Understanding Skills I」では、資源の有効活用や循環運用を、海外実地研修で学習する。継続履修する3年生選択科目「Global Understanding Skills II」では、現地での学習を発表し、持続可能社会の実現に向けた方策を、国際機関や地域社会に提案する。						
⑧研究開発の内容等	<p>(1) 目的・目標</p> <p>持続可能な社会を目指す先進的事例を身近な地域に置き換え、地域の特性に根差した、持続可能な社会をめざす実践的取組の提言を策定する。その提言を日本語と英語で作成し、日本語版は京都府と京都市に、英語版は国連環境計画（UNEP）と経済協力開発機構（OECD）に提出する。この活動を通して地球規模で進む環境問題に対する問題意識と、それに対して能動的に働きかけることのできる実践力を兼ね備えたグローバル・リーダーの育成及び、その育成に資する教育課程の研究開発、教材の開発を本構想の目的とする。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>39か国からの帰国生徒と国内で生まれ育った一般生徒がともに学ぶ本校では、帰国生徒の生活経験が、社会的事象に対する幅広い視野の獲得に十分には結びつけられておらず、生徒間での共有も必ずしも十分には行われていない。帰国生徒の個別体験を全生徒が共有するとともに、世界的課題について系統的に学ぶことで、自己の経験のみによって形成された世界観から脱却し、より普遍的な課題の中に、自らの体験を位置づけることができるようになる。その際、同志社大学、同志社女子大学から講師を招聘しテーマに即した講演を企画することで、一貫校としての連携がより組織的なものとして強化される。</p> <p>また、世界的な課題を解決するための具体的方策を考察することで、現状においては教科指導内に留まっている課題発見能力、プレゼンテーションやディスカッションの能力の育成を、実際の政策提言の策定の作業にも拡大していくことができる。こうして策定したものを、最終的に関係諸機関に対して提言することにより、その提言が具体的な働きかけの次元に発展させられる。</p> <p>以上の方法によって、地球規模で進む環境問題に対する問題意識と、それに対して能動的に働きかけることのできる実践力を兼ね備えたグローバル・リーダーを育成することができると考えられる。</p> <p>(3) 成果の普及</p> <p>課題研究の成果として、持続可能な社会について、地域社会や国際機関に実際に提言を行う。同志社小学校、同志社国際学院初等部の小学生を対象に環境教育を行うことで持続可能な社会を維持する実践を取り入れる。さらに、生徒の作成したレポートや研究論文を学校ホームページ上で発信し、学内外での研究発表会も実施する。</p>						
	⑧-1 全体						

<p>⑧ -2 課 題 研 究</p>	<p>(1) 課題研究内容 持続可能な社会に向けた政策提言のため、以下の科目を新設する。 ア「Global Understanding Skills(Basic)」【基礎的知識の習得】 イ「Global Understanding Skills I」【課題解決学習、フィールドワーク】 ウ「Global Understanding Skills II」【課題解決学習】 ア～ウの科目を設置し、環境先進国であるオーストリア、ドイツの事例を参考に持続可能な社会について学び、提言できるグローバル人材育成のためのプログラムを開発する。</p> <p>(2) 実施方法・検証評価 ≪実施方法≫ 【1年生】 ・帰国生徒、一般生徒の生活経験の共有のためのグループワークを実施し、グローバルな社会課題につながる経験を抽出する。 ・大学の教員を講師として招聘し、グローバル社会や環境問題についての基礎的知識を獲得させる。 ・環境先進国であるオーストリア、ドイツの事例について学習する。 【2年生】 ・オーストリア、ドイツでのフィールドワークへの事前学習をする。 ・オーストリア、ドイツでのフィールドワークを実施をする。 ・フィールドワークの報告冊子、ホームページを作成する。 ・海外提携校とのディスカッションやテーマ学習を行う。 ・政策提言の準備として関係諸機関についてリサーチし、関係諸機関との質疑を行う。 【3年生】 ・京都府、京都市、国際機関（UNEP、OECD）に日本語、英語で政策案を立案し、政策提言を行う。 ・小学生への環境教育を行う。 ・全校生徒に対して発表会を行う。 ≪検証評価≫ ・レポート、報告書、政策案を担当教員と招聘した講師が評価する。 ・政策に対する関係諸機関からのフィードバックを受ける。 ・生徒自身による相互評価を行う。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 特になし。</p>
<p>⑧ -3 上 記 以 外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 既存の選択科目「English Elective」として2年生に新講座「Research, Debate, and Presentation」を設置し、3年生には「Advanced Academic English」を設置する。2年生では、プレゼンテーション、ディベートの方法、さらに議論の質を高めるためのリサーチスキルを身につけさせる。3年生では、『Cambridge Academic English』を用いて基本的な文献調査の方法、レポート作成方法などの基礎的なスキルを身につけさせる。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 なし。</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法 Smith College、Phillips Academy Andover、Harvard Universityなど提携校へのサマープログラムへの派遣を継続する。アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、台湾、大韓民国の提携校との交換留学を継続すると同時に、課題研究でプロジェクトを立ち上げ、提携校の高校生との意見交換のための議論の場を設定していく。</p>
<p>⑨その他 特記事項</p>	<p>課外で「Global Enterprise Challenge」（アントレプレナーシップ開発センター主催）に応募し、世界大会への出場、入賞を目指す。「Global Enterprise Challenge」は、世界中の高校生によるビジネスプランコンテストで、取り上げられる課題はグローバルな社会課題が中心である。平成25年度は校内予選を経た本校代表が国内1位となり世界大会に出場した。</p>

ふりがな	がっこうほうじんどうししゃ どうししゃこくさいこうとうがっこう	指定期間	27～31
学校名	学校法人同志社 同志社国際高等学校		

平成27年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）								
	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	目標値(31年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
a	SGH対象生徒:		人	人	人	人	人	78人
	SGH対象生徒以外:		44人	19人	人	人	人	60人
目標設定の考え方: 現状は数%程度であるが、SGH対象生徒の40%、対象生徒以外は10%を目標とする。								
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
b	SGH対象生徒:		人	人	人	人	人	50人
	SGH対象生徒以外:		47人	53人	人	人	人	30人
目標設定の考え方: 留学を希望するが費用面で行けない生徒も、文科省の支援の活用により留学の実現を目指す。								
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
c	SGH対象生徒:		%	%	%	%	%	95%
	SGH対象生徒以外:		85%	85%	%	%	%	90%
目標設定の考え方: 以前から留学や海外での活躍を希望する生徒が多い。SGH事業でさらに増加することを目指す。								
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
d	SGH対象生徒:		人	人	人	人	人	20人
	SGH対象生徒以外:		0人	13人	人	人	人	10人
目標設定の考え方: SGHの取組でモチベーションが上がり、参加者が増えることで、入賞を続けることを目標とする。								
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
e	SGH対象生徒:		%	%	%	%	%	90%
	SGH対象生徒以外:		72%	68%	%	%	%	72%
目標設定の考え方: 英語クラスをCEFRのレベル別に編成し、より効果的な英語力アップが可能になる。高い目標を設定する。								
(その他本構想における取組の達成目標) 国内国外でのディベート大会に参加する生徒数								
f	SGH対象生徒:							30人
	SGH対象生徒以外:			0人				10人
目標設定の考え方: 課題に対し、考えを錬りあげる力を付けるために有効なディベート大会への参加者を増やす。								

1' 指定4年目以降に検証する成果目標								
	25年度	26年度	30年度	31年度	32年度	33年度	34年度	目標値(34年度)
国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合								
a	SGH対象生徒:		%	%	%	%	%	98%
	SGH対象生徒以外:		93%	92%	%	%	%	90%
目標設定の考え方: 同志社大学への進学者が多く、割合は十分に高い。他大学を含め該当大学進学者数の増加を目指す。								
海外大学へ進学する生徒の人数								
b	SGH対象生徒:		人	人	人	人	人	6人
	SGH対象生徒以外:		4人	4人	人	人	人	4人
目標設定の考え方: 海外大学への進学は費用的な制約が大きい、海外に目を向ける生徒の倍増を目標とする。								
SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合								
c	SGH対象生徒:		%	%	%	%	%	70%
	SGH対象生徒以外:		-	-	%	%	%	30%
目標設定の考え方: 対象生徒でも多様な進路選択を考慮し70%、その他の生徒は1年生で履修しているので30%を目標とする。								
大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数								
d	SGH対象生徒:		人	人	人	人	人	30人
	SGH対象生徒以外:		-	-	人	人	人	10人
目標設定の考え方: 現状でも毎年20人程度が大学での交換留学に参加している。SGH事業により倍増を目標とする。								

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	目標値(31年度)
課題研究に関する国外の研修参加者数								
a	0人	9人	人	人	人	人	人	20人
目標設定の考え方： 参加対象を拡げること注力し、参加者数の大幅な増加を目標とする。								
課題研究に関する国内の研修参加者数								
b	0人	1人	人	人	人	人	人	20人
目標設定の考え方： SGH事業でモチベーションが上がるので、情報提供に努めることで参加者数が増える。20名を目標とする。								
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数								
c	3校	4校	校	校	校	校	校	6校
目標設定の考え方： 現状は以前から交流している学校であり、SGH事業に伴い2校の新規開拓を目標とする。								
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
d	20人	16人	人	人	人	人	人	40人
目標設定の考え方： SGH事業の取組で必然的に増加する。eと合わせて、のべ80回とする。								
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
e	0人	28人	人	人	人	人	人	40人
目標設定の考え方： SGH事業への取組で必然的に増加する。dと合わせて、のべ80回とする。								
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数								
f	0人	20人	人	人	人	人	人	50人
目標設定の考え方： SGH事業に並行し、情報提供に力を入れることで50名に増やすことを目標とする。								
帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)								
g	543人	532人	人	人	人	人	人	540人
目標設定の考え方： 開校当初から定員の3分の2の帰国生徒を受け入れている。今後も現状通りの受入を継続する。								
先進校としての研究発表回数								
h	0回	0回	回	回	回	回	回	4回
目標設定の考え方： SGH事業について年1回、本校で研究発表会を行う。他の会での発表を加えて年4回を目標とする。								
外国語によるホームページの整備状況								
○整備されている △一部整備されている ×整備されていない								
i	△	△						○
目標設定の考え方： SGH事業を進めるに当たり、英語でのホームページが有効活用できる。整備する。								
(その他本構想における取組の具体的指標) 中間成果報告の小冊子の作成・配布回数								
j	0回	0回						3回
目標設定の考え方： SGH事業の取組状況や成果の中間報告のための小冊子を学期に1回作成し、関係諸機関に配布する。								

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度
全校生徒数(人)	837	833	0	0	0	0	0
SGH対象生徒数							
SGH対象外生徒数							